Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-03

サステナビリティ報告とレトリック－経営トップメッセージのテキストマイニング－

中尾，悠利子

(Degree)
博士（経営学）
(Date of Degree)
2017-09-25
(Date of Publication)
2018-09-01
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲第7018号
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007018

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

学位論文審査要旨

氏名　　中尾　悠利子

論題　　サステナビリティ報告とレトリック
　　ー経営トップメッセージのテキスト
　　マインニングー

審査　　平成２９年９月

神戸大学

論文内容の要旨

本論文は，サステナビリティ報告における経営トップのメッセージに対して，テキストマインニングを通じて，経営トップのサステナビリティ経営に対する意図を分析することを目的としている。2001 年から 2015 年の 15 年間におけるサステナビリティ報告のトップメッセージを分析対象として，「制度」，「企業」，「個人（経営トップ）」の 3 つの側面から，多重コレスポンデンス分析を中心とした分析を行い，いくつかの特徴的な経営トップメッセージの傾向を析出している。

第 1 章では，論文の目的と背景，テキストマインニングをする意義が説明されている。特に，日本企業の環境経営面での国際的な評価が低下傾向にあるのは，経営トップの意識にあるのではないかという問題意識が述べられる。

第 2 章では，サステナビリティ報告と言葉を対象とした先行研究レビューを行い，本論文の位置づけを明確にしている。特に，「制度」，「環境パフォーマンス」，「経営トップの特性」と言葉との関連に関する研究課題を提示している。

第 3 章では，テキストマイニングの概要と選定した語彙の採用基準を説明した後に，本論文の解釈指針となる CSR レトリックについて解説し，最後に本論文で採用する 67 語彙を示している。本論文では，Castelló & Lozano (2011)が提唱する，戦略的 CSR，制度的 CSR，弁証法的 CSR の 3 つに区分された CSR レトリックを一部修正して採用している。

第 4 章では，制度がどのようにレトリックに影響しているのかを分析するために，環境・社会課題への政策やイニシアティブに関連する年度を制度の代理指標と捉えて，語彙の経時分析を行っている。分析結果は，語彙自体が制度的文脈に関連していることを示している。CSR レトリックに関しては，戦略的レトリックは 15 年の分析期間全体を通じて，制度的レトリックはサステナビリティ報告の普及期に多く見られ，弁証法的レトリックは普及期から成熟期にかけて多く見られることを明らかにした。

第 5 章では，企業とレトリックの関係を明らかにするために，環境/CSR パフォーマンスが語彙の使用と関連するのかを分析している。その結果，環境/CSR パフォーマンスの良い企業では，環境や CSR に関する語彙や弁証法的 CSR レトリックの語彙が使用される傾向があることと，環境/CSR パフォーマンスの悪い企業は，環境・CSR とは関連しない別の語

彙が多く使用されていることを明らかにした。CSR レトリックとの関係では，環境/CSR パフォーマンス上位企業は戦略的 CSR レトリックや制度的レトリックと関係することが示された。

第 6 章では，経営トップの特性として「在職期間の長短」と「国連グローバル・コンパクト署名経営トップ」を採用し，それが語彙の使用傾向に関係しているのかどうかを分析している，その結果，在職期間が長期になれば関連する語彙が少なくなることや，環境/CSR パフォーマンスの上位企業でかつ在職期間の短い経営トップでは，制度的 CSR レトリックを使用する傾向が見られ，国連グローバル・コンパクト署名経営トップでは弁証法的 CSR レトリックを使用する傾向が示された。さらに，2001 年から 2015 年の間において，同一の経営トップが在職していた 6 社による，語彙の傾向の比較分析も行い，在職期間の長短の特性よりも，個人レベルによる語彙への使用傾向が異なることを示した。

第 7 章では，上記の分析結果に基づき，結論とインプリケーションを示している。

論文審査の結果の要旨

本論文は，日本企業の 15 年間のサステナビリティ報告における経営トップメッセージに対してテキストマインニングを行った日本で最初の研究である。日本では，サステナビリティ報告書に対するテキストマインニングがまだ本格的に実施されておらず，その意味で本論文は未開拓の分野を切り開いた意義がある。本論文の主な学術的貢献は以下の 3 点にまとめられる。

第一の貢献は，15 年間のサステナビリティ経営の経営トップメッセージを分析し，様々な傾向を明らかにしたことである。経営トップの使用する語彙がその制度的環境で変化することや，環境/CSR パフォーマンスの状況によって変化すること，特にパフォーマンスの下位企業が抽象的な語彙を使用する傾向にあることが明らかになったことは，今後のサステナビリティ報告の発展に対して重要な示唆を与えるものである。

第二の貢献は，経営トップの特性にまで踏み込んで研究したことである。経営トップメッセージは，本当に経営トップの言葉かどうか判別することが困難であるが，在職期間と国連グローバル・コンパクトの署名という点から特性を判別して分析したことは，一つの有力な方法として評価できる。その結果についても，いくつかの特徴的な傾向（たとえば，在職期間の短い経営トップは制度的レトリックを使用する傾向があることや，在職期間長期の経営トップは関連する語彙が少ないことなど）を明らかにしたことは，重要な知見であり，今後のさらなる研究へ展開できる道を開いたと評価できる。

第三の貢献は，定性的なテキスト分析での解釈基準であった Castelló & Lozano (2011) の CSR レトリックを，定量的なテキストマインニングでも活用できる方法を開発したことである。定性的な研究ではコンテクストから解釈することができるがその判断は主観的にならざるを得ない。しかし，本研究ではそのような解釈指針を，定量的に分析された語彙の関係から検証するという客観性の高い手法として活用できる可能性を示しており，これは重要な方法論的貢献と考えられる。

ただし，本研究は，これまで未開拓の領域に挑んだ探索的研究であるため，いくつかの課題も残っている。特に，戦略的レトリック，制度的レトリック，弁証法的レトリックという 3 つのレトリックから分析しているにもかかわらず，それぞれのレトリックの特徴については，より一層理論的に掘り下げる余地があったと思われる。そうすれば，より実践に有効なインプリケーションを導出できたと思われる。ただし、このような課題は挑戦的な研究には一般にみられるもので、上記の本論文の学術的貢献を損なうものではない。

以上の理由から、審査委員は、本論文の著者が、博士（経営学）の学位を授与されるに十分な資質を持つものと判断する。

平成 29 年 9 月 13 日

審査委員　主査　教　授　國部　克彦

准教授　堀口　真司

教　授　西谷　公孝

教　授　清水　泰洋